

# ガンビア川中流域において個人労働と共同労働が維持する多様な品種

平成 17 年度入学  
派遣先国：ガンビア共和国  
片山 祐美子

キーワード：ガンビア川流域，共同労働，イネ，品種

## 対象とする問題の概要

ガンビア川流域では、古くから男性による雑穀栽培と女性による稲作を基幹とした農業が営まれてきた。近年、この地域は急激な人口増加に伴って土地に対する人口圧が非常に高くなっており、主食作物の自給率は 50%に満たない地域が多い。本調査を行なったガンビア川中流域に位置する B 村では、人口密度が 400 人/k m<sup>2</sup>にも達し、2007 年の穀物自給率はわずか 30-40%であった。

また、この地域の降水量は年較差が大きく、穀物の収穫量もそれに伴って大きく変動する。調査村における 2007 年の雑穀とコメの収穫量をそれぞれ 1 とすると、2007 年と同様に年間降水量が 1000mm 超の 2005 年の収穫量は雑穀で 0.85、コメが 1.20、年間降水量が 700mm と少雨であった 2006 年ではそれぞれ 1.20、0.45 であった。このように調査地域は、穀物自給率の低さと生産の不安定性という問題を同時に抱えている。

## 研究目的

調査村に生活する農耕民マンディンカには、シンキローとよばれる社会単位がある。シンキローは複数の世帯からなり、日々の食事を共にするという性質上、消費単位として重要である。彼らは収穫物がシンキローに帰属する耕地（以下、共同耕地）と、個人の所有となる耕地（以下、個人耕地）を区別して利用する。これまでの調査で、収穫物の消費段階において、個人所有となる収穫物をシンキロー全体の消費にまわす場面や、収入に応じた食糧購入への貢献などが観察され、シンキロー単位での共食の慣行が食糧供給を安定化させる可能性を示唆した。

そこで本研究では、調査村の食糧供給を安定化していると考えられる諸事象について、生産段階に注目し、分析することを目的とする。

## フィールドワークから得られた知見について

男性が栽培する穀物には、早生と晩生のトウジンビエがそれぞれ 1 品種、ソルガムは早生 1 品種と晩生 2 品種、トウモロコシがある。作付面積の約 60%を占める早生のトウジンビエは耐乾性に優れ、少雨の際に減少するコメの生産量を補填できる作物として選択性が高い。

男性が牛耕を用いて少人数で農作業を行なうのに対し、女性は耕起から収穫までを人力で行なう。彼女らはさまざまな規模の集団を形成し、労働に利用する。収穫作業において共同労働を利用した場合、個人労働の場合に比べて、人・時間当たりの収穫量は高かった。

イネは 49 もの品種（すべてアジアイネ (*Oryza sativa* L.)) が女性によって栽培されており、その内訳は早稲が 3 品種、晩稲が 44 品種、残りの 2 つは早稲と晩稲の中間とされる品種である。人びと

は生育の早晩などの生態的特徴や生産性、形態的特徴などからイネの品種を識別している。



ある女性の裏庭：個人耕地で収穫した 5 品種のコメが並ぶ

シンキローで消費するコメを作付けする共同耕地において、人びとは頻りに協働し、村内で広く栽培される品種を中心とした稲作を実践する。共同労働で一度に収穫するため、一筆に 1~2 品種を栽培して収穫期を合わせようとする。それに対し、個人や少人数で作業する割合が比較的高い個人耕地では、収穫期をずらすため、一筆に多くの品種を栽培する。

また、共同労働はイネ品種の特性など農業にかかわるさまざまな情報を交換する場として重要であり、女性が種籾を獲得する機会も与えていた。



約 50 人が参加する収穫作業



共同労働を終えてコメを一束もらう（左の女性）

### 今後の展開・反省点

今回の調査では、人びとが選択し、栽培している各品種の収量が気象条件によって左右され、品種選択を生産性の観点から説明できなかった。また、慢性的な降水量の不足を口にしながらも、耐乾性に優れると言われ、近隣の村で栽培されているネリカ品種や早生品種を積極的に取り入れてこなかった人びとの農業実践は、食料供給の安定化に反するようにもみえる。今後は、歴史的変遷や技術的、社会的側面からも分析をすすめ、この地域の農耕文化を多面的に描いていきたい。